

カリタス女子中学校 第二回入学試験

二〇二一年二月一日（午後）実施

# 国語問題

（五〇分）

\* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

\* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

空気のきれいな所で晴れた日の夜空を見上げてみると、星くずの溢れる世界は本当に夢幻の世界で、心が引き込まれそうになりますね。私たちが星空を目にしたとき、一番はじめに思うのはどの星のことでしょうか。もちろんそれは人によってさまざまですが、多くの人がまっさきに、学校で教えてもらったカシオペアやオリオン星座を探そうとするではありませんか。「星座」は天空を観察したときにすぐに目に入ってくる星の列や塊が作り出す図形ですが、その図形を見ると私たちは何となくロマンティックな感じになります。星空に浮かび上がるいろいろな動物や器物の形、あるいは神話に登場する人物の物語などのことを考えると、夜空の世界が地上の日常的な世界とは別の、もう一つの世界を作っているような気持ちになってきます。

星座は夜空に輝く無数の星の中でも、きわだって目につくような星の集まりをきめて、その形に意味のある言葉を当てはめたものです。「星座」という言葉そのものが漢字でできているように、地上から見た星の集まりに名前をつけて、一つの塊として見る見方そのものは中国の古代の①天文学にもありますし、中国よりもっと古い、②キゲンゼン三〇〇〇年くらいのメソポタミアの遺跡やエジプトの天文学の記録にもあります。「やぎ」とか「おうし」、「壺」とか「竖琴」という星座は、いろいろな地方で使われていた星座ですが、それが指す星は異なっていたようです。そして、古代の地中海の世界で海上の商業を司っていたフェニキア人が、そのようないろいろな星座の見方をギリシアに伝えたところ、それらのいくつかとギリシア神話に登場する神々を組み合わせた形で、ギリシアの星座表もできたそうです。現在、世界の人びとの間で広く使われている星座表は、この古代ギリシア伝来のものです。そのために、カシオペア（アンドロメダの母、Wの字の形をしている）とか、ペガサス（天馬、羽をもった馬、大きな四辺形）のような、ギリシア神話に登場する神の名前が含まれているのです。

しかし、人類の古代文明伝来の星座の見方にはいろいろなものがあつたのに、その中でも 古代ギリシアの神話に従った星座表が代表的なものになったのはなぜでしょうか。じつは、これには相当に意義深い理由があります。

夜空を見上げたとき、もっとも目につくのは大きく輝く星を結び合わせてできるいろいろな星座の姿ですが、もう一つ、これとはまったく別の意味で非常に目立って見える星があります。それはたとえば、夕焼けの空が夜に変化していくとき、最初に光り出す「宵の明星」とか、明け方最後まで輝きを見せている「明けの明星」のように、私たちの星である地球に実際に非常に近くあるために、特別な輝

きを印象づける星です。いうまでもなく、宵の明星と明けの明星とは、本当は同じ一つの星、1 金星の別名です。そして、金星の英語はビーナス、つまり美の女神ですし、赤い惑星<sup>わくせい</sup>、火星の英語はマース、木星はジュピターですから、地球を取り巻く惑星の名前にもギリシア神話の系列を引くローマ神話の神の名前がついています（ギリシア神話の登場者とローマ神話の登場者は、名前だけちがつていますが、まったく同じ神や人間です。美の神ビーナスはギリシア神話ではアプロディテ、軍神マースはアレス、神々の長ジュピターはゼウスです）。

ギリシア神話に登場する神々の名前をつけた星座の世界と、同じくギリシア＝ローマ神話に登場する神々の名前をもった惑星とは、どちらも私たちが星空を見たときにすぐに目に入るという意味では同じような星であるともいえますが、B その振る舞い<sup>ま</sup>はかなり異なります。

星座で一杯<sup>いっぱい</sup>の星空は、一晚のうちに東の空から西の空へと回転しています。それは日中に太陽がわれわれの目から見て、東から西へと回転して見えるのとまったく同じで、北極星を中心とした天空全体の回転です。ところが、金星や火星のように、私たちが「惑星」と呼んでいる星は、夜空全体の運行とはまったく無関係に、一晚のうちにかなり複雑な軌跡<sup>きせき</sup>を描いて<sup>えが</sup>います。惑星の英語はプラネットですが、これらの太陽系<sup>たいようけい</sup>に属する星々は、一晚のうちに不思議な曲線を描いたり、行ったり来たりしているように見えます。そのためにこれらの星は惑星<sup>まど</sup>という意味での「惑星」とか、ぶらぶら遊んでいる星という意味で「遊星」と呼ばれるのです。

2、地上から見上げた空に神話的な神の姿を重ねて考えることと、水星や金星と地球や太陽を含む惑星の運行の様子を、一つのシステムとして考えてみるということは、どのように違<sup>ちが</sup>うことなのでしょう。それぞれの星座は、地球から見た星々の塊をその「見方」をもとにして、一つのまとまりあるものと考えたものです。それは夜空の星の世界が、私たちの目で見えるままにできていると考えて、そこにいろいろな塊や集まりを見つけて、それに名前をつけたものです。

3、「惑星」や「太陽系」という考えは、C そうした目で見えるままの世界とは全然ちがう別の見方で、星の世界を考えたものです。正確にいうと、D いうまでもないことですが、古代の人びとはインドであれギリシアであれ、惑星の運動を組み合わせてできる星のシステムが、太陽を中心にしてできていると考えていたわけではありません。古代の人びと、あるいは東洋でも西洋でも、中世までの人びとはみな、地球が世界の中心にあり、その周りを太陽や水星、金星、土星が回っていると考えていました。彼ら<sup>かれ</sup>はみな地球中心の考え方、つまり「天動説」を採用していました。太陽を中心にした「地動説」が認められるようになったのは、\* コペルニクスやガリレイなど、西

洋の近世の人びとの時代がきてからです。

しかし、天動説と地動説の比較もきわめて重要ですが、その前にまず、そもそも星の世界を一つの「運動システム」として考えようという発想が、非常に革命的だということに注意を向けたいと考えます。夜空の全体が一晩のうちに東から西へと移動しているということは、それ自体が大きな運動のシステムです。しかしながら、それとは別に、その運動に逆らったようにして、いくつかの目だった星、つまり惑星が複雑な軌道を描いている。しかも、その複雑な軌道をまとめてみると、地球を中心とした（古代・中世の天動説）、あるいは太陽を中心とした（近世以降の地動説）、一つの運動のシステムが浮かび上がってくる。

いくつかの大きな星が作り出しているこの運動の軌道を、一つのシステムとしてまとめてみるとどうなるだろうか——。地球中心の惑星の運行の軌跡を一つのシステムにまとめる、というこの作業を集行的に行って、科学としての天文学の基礎となる考え方を作り上げたのがギリシア人たちでした。夜空の星の世界に坎する知識は、地球上のどんな古い文明にも組み込まれていて、それを題材にした物語や神話はたくさんあります。しかし、そうした地上からの天の姿の「見え方」にしたがって、宇宙を理解するという方法を思い切って、③ スて去って、運動する天体のシステムを別の角度から「構成してみる」。これが、科学としての天文学の出発点であり、その原型を作り上げたのがギリシア人の科学です。もちろん、ギリシア人も神話をもっており、星座をもっていました。しかし、それとは別に、科学としての天文学的知識が可能なのではないのか——彼らはこう考えたのです。

じつはここにこそ、科学の誕生とともに哲学の誕生ということを生み出した、とても大きな思想の革命があるのです。次の章で見るように、天動説から地動説への転換という、西洋の近世の最初に生じた宇宙像の転換は、それ自体が歴史的にも最大級の、非常に大きな意味をもつ思考の革命です。地球は太陽の周囲を回る星の一つにすぎず、いくつかある惑星の中の一つにすぎない。惑星のシステムの本当の中心は太陽であり、そこに本当の星どうしの運行の組み合わせがある。自分たちの住む地球を世界の中心からはずして、別の中心を認めることは、それ自体がとてつもなく大きな考え方の転換を必要としていることです。

しかしながら、この転換が生じるまえに、何よりもまず、いくつかの惑星が一つの運動のシステムを作っているという発想が、先になければなりません。そしてそのシステムは、空に見えている星の運行を素直に観察して、たくさん記録を作り、それにいろいろなロマンティックな名前をつけていては見えてこない。むしろ、目に見える点の姿の背後に、それよりも本当の星の運動の世界があるのでないか。そのために、目に見えている夜空の星を一旦は忘れて、それとは別に、その背後に隠れている「天空の本当の姿」を探ってみる。

これが、科学としての天文学の出発であり、4、そのような G 思考の革命はただ、星座の世界とは別の星空の見方を考案するとい  
うことだけではすまない、非常に複雑な思考の作業を含んでいました。それはある意味では、天動説から地動説への変換と同じくらい大  
げさな、きわめて驚くべき H 精神的な革命を意味しているかもしれないのです。

〈伊藤邦武『宇宙はなぜ哲学の問題になるのか』(ちくまプリマー新書)より〉

〔語注〕

- ※ 夢幻<sup>むげん</sup>……………夢とまぼろし。
- ※ メソポタミア……………現在のイラクとシリア東部・イラン南西部の地域。古代文明が生まれた土地の一つ。
- ※ フェニキア人……………キゲンゼン三〇〇〇年頃から地中海東岸中部に小さな国々をつくった人々。
- ※ 軌跡<sup>きせき</sup>……………物体の運動によってできる図形。
- ※ 太陽系……………銀河系に属し、太陽を中心に運行する天体の集団。水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星の八惑星<sup>わくせい</sup>と多数の衛星<sup>えいせい</sup>、非常に多数の小惑星<sup>しょうわくせい</sup>のほかに彗星<sup>すいせい</sup>、流星<sup>りゅうせい</sup>、微粒子<sup>びりゅうし</sup>(小さなつぶ)などをふくむ。
- ※ コペルニクスやガリレイ……………コペルニクス(一四七三〜一五四三)はポーランドの天文学者で、ローマカトリック教会の聖職者。ガリレイはガリレオ・ガリレイ(一五六四〜一六四二)のことで、イタリアールネサンス末期の科学者。どちらも地動説を唱えたことで知られる。
- ※ 軌道<sup>きどう</sup>……………天体の運行する道筋。

問一 ①天文学 ②キゲンゼン ③スて の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 ① 1 ② 4 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア 一方 イ しかも ウ そのため エ さて オ つまり

問三 A 古代ギリシアの神話に従った星座表 とありますが、本文中で筆者は、「古代ギリシアの神話に従った」夜空の見方と対比的な古代ギリシア人の夜空の見方を挙げています。この二つの見方について示した次の X にあてはまる言葉を、本文中から二文字でぬき出しなさい。

古代ギリシアの神話に従った見方 ↑ ↓ X としての天文学の基本となる見方

問四 B その振る舞いはかなり異なっています。とありますが、星座と惑星の動きにはどのようなちがいがありますか。これについて説明した次の文章の Y・Z にあてはまる言葉を、本文中の語句を用いてそれぞれまとめて答えなさい。ただし、( ) 内で示した字数の指定にしたがうこと。

星座は一晩のうちに Y (二十字以内) するが、一方で惑星は一晩のうちに Z (十五字以内) する。

問五

C そうした目で見えるままの世界 とありますが、これはどのような見方をいうのですか。この説明として正しいものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア いくつかの星が作り出す複雑な軌道きどうを一つのシステムとしてまとめる見方。  
 イ 星々の塊かたまりをその形の通りに一つのまとまりあるものとしてとらえる見方。  
 ウ 星は日常的な世界とは別の世界に存在するものであると考える見方。  
 エ 複雑な軌跡きせきを描くように動く星を「遊星」として区別する見方。  
 オ 地上から見上げた空に神話的な神の姿を重ねて考える見方。  
 カ 太陽を中心に地球などの惑星わくせいが回っていると考える見方。

問六

D いうまでもない と同じ意味を表す熟語としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 禁止    イ 失望    ウ 推測    エ 当然    オ 対比

問七

E 思想の革命、 F 思考の革命、 G 思考の革命、 H 精神的な革命 とありますが、これらは同じ「革命」という言葉が入っていますが、その内容は E・G・H と F との二種類に分けられます。これについて、次の(1)・(2)に答えなさい。

- (1) E・G・H の「革命」の内容をまとめてある一文としてもっともふさわしいものを、Eより前の部分から探し、はじめと終わりの五字をぬき出しなさい。また、F の「革命」の内容を簡単に表している部分を十二字でぬき出しなさい。
- (2) この二種類の「革命」の共通点はどのようなことですか。自分の言葉で簡潔に答えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

「真<sup>ま</sup>智<sup>ち</sup>久<sup>ひさ</sup>」は、大学で建築を学び、現在は建築設計事務所<sup>せきご</sup>で働いている。以下の本文は彼<sup>かれ</sup>が散歩中に立ち寄った図書館<sup>としよかん</sup>のできごとから始まる。

はじめて会ったときには、特に美人<sup>かみ</sup>だとか可愛いひとだと思<sup>おも</sup>ったわけではなかった。

ただ、耳<sup>みみ</sup>のかたが印象<sup>かみ</sup>的で、じっと見つめていたことを覚えてい<sup>おぼ</sup>ている。黒<sup>くろ</sup>い髪<sup>かみ</sup>のすきまからのぞいた耳<sup>みみ</sup>は、美しい曲線<sup>まが</sup>を描<sup>えが</sup>いていた。ピアスの穴<sup>あな</sup>などは開<sup>ひら</sup>いていない、まっさらな耳<sup>みみ</sup>。機能<sup>かみ</sup>はデザイン<sup>いっち</sup>に一致<sup>いっ</sup>する、という言葉<sup>ことば</sup>が頭<sup>あたま</sup>に浮<sup>う</sup>かんだ。相手の言葉<sup>ことば</sup>をきちんと聞<sup>き</sup>く。耳<sup>みみ</sup>をかたむける。そういう耳<sup>みみ</sup>だという気がした。

「それでは、建築<sup>けんちく</sup>をテーマにした作品<sup>さく品</sup>はいかがでしょう？」

カウンター<sup>かウナター</sup>の向<sup>むか</sup>こう側<sup>がわ</sup>で、彼女<sup>かのじよ</sup>は言<sup>い</sup>った。

彼女の声<sup>こゑ</sup>と、耳<sup>みみ</sup>のかたがは、しつかりと記憶<sup>きおく</sup>に焼<sup>や</sup>きついている。

日曜日<sup>にちようび</sup>の図書館<sup>としよかん</sup>。

よく晴<sup>は</sup>れた日<sup>ひ</sup>だった。春<sup>はる</sup>の陽<sup>ひ</sup>気に誘<sup>さそ</sup>われるようにして、ぶらぶらと散歩<sup>さんぽ</sup>をしていたところ、その図書館<sup>としよかん</sup>の前<sup>まへ</sup>を通<sup>とほ</sup>りかかり、ふらりと立ち寄<sup>と</sup>ったのだった。

〈 中 略 〉

知<sup>ち</sup>の集積<sup>しゆく</sup>された場所<sup>ばしょ</sup>にふさわしく、室内<sup>しやう</sup>は静寂<sup>せいじやく</sup>に①ツツまれ、落ちついた雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>気に満<sup>み</sup>ちていた。

読書家<sup>よみかみ</sup>とは言<sup>い</sup>えない智久<sup>ちひさ</sup>も、その空間<sup>くわん</sup>にいと、なにか読<sup>よ</sup>みたくな<sup>な</sup>った。建築<sup>けんちく</sup>の写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>集<sup>しゆ</sup>でもながめようか。いや、たまには活字<sup>かつじ</sup>を読む<sup>よむ</sup>のもいいかもしれない。本<sup>ほん</sup>を広<sup>ひろ</sup>げて、物語<sup>ものがたり</sup>の世界<sup>せかい</sup>に没頭<sup>ぼつとう</sup>したい。そんな気分<sup>きふん</sup>にな<sup>な</sup>ったのだが、自分<sup>おのれ</sup>ではこれ<sup>これ</sup>といったもの<sup>もの</sup>を思<sup>おも</sup>いつか<sup>いつ</sup>な<sup>な</sup>かった。

そのとき、レ<sup>レ</sup>フ<sup>フ</sup>ア<sup>ア</sup>レン<sup>ン</sup>ス<sup>ス</sup>カウ<sup>ウ</sup>ン<sup>ン</sup>ター<sup>ター</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>女<sup>にょ</sup>性<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>す<sup>す</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>、目<sup>め</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>った。引<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>寄<sup>よ</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>れる<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>して、その前<sup>まへ</sup>に座<sup>ま</sup>った。本<sup>ほん</sup>の専<sup>せん</sup>門<sup>もん</sup>家<sup>か</sup>。彼女<sup>かのじよ</sup>ならば、**1**、面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>い本<sup>ほん</sup>を知<sup>し</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>だ<sup>らう</sup>と思<sup>おも</sup>った。

智久<sup>ちひさ</sup>は学<sup>がく</sup>生<sup>せい</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>に、大<sup>だい</sup>学<sup>がく</sup>の図<sup>ず</sup>書<sup>しょ</sup>館<sup>かん</sup>でレ<sup>レ</sup>フ<sup>フ</sup>ア<sup>ア</sup>レン<sup>ン</sup>ス<sup>ス</sup>をよ<sup>よ</sup>く利<sup>り</sup>用<sup>よう</sup>した。論<sup>ろん</sup>文<sup>ぶん</sup>を<sup>を</sup>書<sup>か</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>な<sup>な</sup>ど、自<sup>おの</sup>分<sup>れ</sup>では見<sup>み</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>文<sup>ぶん</sup>献<sup>けん</sup>でも、



専門の資格を持つ司書がどこからか探してきてくれて、非常に助かったものだ。

だから、その日も、図書館で「読みたい本」を探すため、レファレンスカウンターに向かった。そこにいたのが、彼女だったのだ。

智久の「なにか面白い本を教えてください」という漠然としたリクエストに対して、彼女は少しだけ戸惑ったようだ。しかし、落ちついた物腰で、質問を返してきたのだった。

智久が、なにを面白いと感じるのか、どんなことに興味があるのか、どんなジャンルが好きなのか、求めているものは一体なんなのか……。

どのようなのが読みたいのか。

それは、智久自身にもわかっていなかった。

「なんでもいいんです、あなたが最近読んで感動した本とか、おすすめの小説があれば、それを読みます」

智久が言うと、彼女はわずかに困ったような表情を浮かべた。

「申し訳ありません。司書は、主観的な判断ではお答えできないのです」

2、司書は利用者の手助けをする役割なのだという。

彼女は「あなたの知りたいことに、わたしも興味があるの。いっしょに探しましょう」という態度で、真剣に智久の話聞いて、心をほぐしていった。

ひとつ答えるごとに、自分の言葉が、彼女の耳に吸いこまれていく。

それは心地よいカウンセリングを受けているかのようだった。

そして、結局、建築をテーマにした小説をいくつか列挙してもらったことになった。

好きなもの、興味があることは、なんといっても、建築だ。いつでも仕事から離れられない。

「建築といっても、ジャンルによって、いろいろありますね。現代物、時代物、恋愛物、ファンタジー、ミステリー、SFなど……。築城や宇宙ステーションの建造なども、建築をテーマとしていると言えなくはないです。作者は日本人のほうがいいですか？ 外国の作品も コウホに入れますか？」

そんなやりとりをしながら、彼女はパソコンを使って、作品を次々とリストアップしていく。そうして、選ばれた本が、幸田露伴の『五重塔』と松家仁之の『火山のふもとで』という二冊だった。

〈 中 略 〉

一週間後、本の返却に行ったときに、彼女のすがたを見つけ、智久は声をかけた。

「このあいだは、ありがとうございます。本、どちらも面白かったです」  
すると、彼女はともうれしそうに微笑んだのだ。

「よかった。気に入っていただけ」

気持ちのいい笑顔だった。

レファレンスで探した本に智久が満足したことを、自分のことのように喜んでいる。

他人の役に立つ喜び。自分の仕事への誇り。

智久がもっとも大切にしていること。おなじ気持ちで、彼女も持っているような気がした。

C その瞬間、彼女のことをもっと知りたい、と思った。

彼女が身につけた紺色のエプロンには、名札がついていた。

胸元の名札には「宮沢永遠子」とあった。

永遠子さん、か。素敵な名前だな。

D このときになって、ようやく、智久は彼女の名前を知り、個人として認識したのだった。

次の週も、智久は図書館をおとずれた。しかし、そのときには永遠子のすがたを見つげることができなかった。今日は休みなのだろうか。がっかりしている自分に気づいて、智久は戸惑った。彼女に会えなかったことで、こんなにも気落ちするとは……。

そのまた次の週も、智久は図書館をおとずれた。カウンターの向こう側に、永遠子のすがたを見つけ、ほっとする。声をかけるわけでもなく、ただ、遠くから見守る。最初に会ったときにはなんのためらいもなく、レファレンスのコーナーに行くことができた。だが、彼女のことを意識するようになったいまでは、**【 E 1.】**

地下の閲覧室には特別設置コーナーがあり、関連資料が展示されている。そのときの展示は「近代美術と絵本の世界」だった。

しばらくすると、どこからか子供が集まってきた。母親らしき女性に連れられた幼い子供、それに小学生同士のグループもいる。この図書館で子供を見かけるのはめずらしい。今日は特別な催しがあるようだ。

3、永遠子ともうひとり<sup>④</sup>年配の司書が、大きな絵本を手にして、子供たちの前にあらわれた。

年配の司書が挨拶をしたあと、永遠子は絵本を広げ、読み聞かせをはじめた。

智久は、本棚の陰に身をひそめるようにして、彼女の声に耳を澄ました。

おじいさんが かぶを うえました。

「あまい あまい かぶになれ。

おおきな おおきな かぶになれ」

穏やかで、落ちついた声。決して大きいわけではないのだが、明瞭で、芯の強さのようなものがある。やわらかでありながら、ふわりと遠くまで運ばれていくような声だ。

うんとこしょ どっこいしょ まだ まだ かぶは ぬけません。

繰り返しのリズムに乗って、彼女の声が響いてくる。

永遠子はことさらに感情をこめるよりも、一言一言をきちんと、はっきりと発音することを心がけているようだった。あくまでも、彼女の声は媒介。主体は、絵本である。集まっている子供たちの意識は、彼女の手にある絵本へと集中している。

ただひとり、智久だけは、絵本の内容ではなく、彼女の声に夢中だった。

こんなに気持ちのいい声の持ち主を、ほかに知らない。軽く目を閉じて、思う存分、彼女の声を堪能する。このまま、永遠子の声に身をゆだねて、まどろむことができれば、どれほど心地よいだろうか……。

ほんやりとそんなことを考えていると、いつのまにか、読み聞かせは終わっていた。

そして、目の前に、永遠子が立っていたのだ。

目が合うと、永遠子は笑みを浮かべた。

「こんにちは。今日もなにかお探しですか？」

永遠子はまだ絵本を手を持っていた。通りすぎようとして、智久の存在に気づいたのだろう。

突然、声をかけられ、智久は動揺を隠せなかった。あわてて、目の前にあった本に手を伸ばす。

「あ、いえ、だいじょうぶです」

闇雲やみくもにつかんだその一冊は、節約レシピ本であった。

智久が立っていたのは、料理本のコーナーだったのだ。

せめて、料理の専門書やプロのシェフの本であれば、Fまだしも、よりによって、節約レシピなんて……。

気恥きはずかしさを感じていると、永遠子は相手を安心させるような声で言った。

「料理ができる男性って、素敵ですよね」

その一言で、智久は心に決めた。

料理のできる男になろう。

そして、料理教室に通うことにしたのであった。

〈藤野恵美『初恋料理教室』（ポプラ社）より〉

## 〔語注〕

※ レファレンスカウンター……図書館の使い方や資料に関する不明点を利用者が相談できるコーナー。

※ 司書……図書館に勤務し、本や資料の収集、管理、利用者への貸し出しなどの仕事を行う職業。

※ カウンセリング……専門的な知識を持つカウンセラーが、相談者のなやみやかかえる問題を聞き、対話を通して解決していくこと。

※ SF……サイエンス・フィクション (science fiction) の略。科学的な空想にもとづいた作り話。

※ 媒介……両方の間に立って、なかだちをすること。  
※ 堪能する……十分に味わい、満足すること。

問一 ① ツツまれ ② 列拳 ③ コウホ ④ 年配 のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 ① ㄋ ③ にあてはまる言葉としてもつともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア きつと イ せめて ウ あくまで エ やがて

問三 A 機能はデザインに一致する とありますが、「彼女」の耳における「機能」と「デザイン」が指す内容をそれぞれ書きなさい。

問四 B 司書は、主観的な判断ではお答えできないのです について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「主観的」と反対の意味の言葉を漢字三字で書きなさい。

(2) この部分からは、司書という仕事に対する「彼女」の考え方が読み取れます。この箇所以外で、この考え方があらわれている「彼女」の行動を本文中から探し、自分の言葉でまとめなさい。

問五 C その瞬間、彼女のことをもつと知りたい、と思った。 とありますが、「智久」はなぜそう思ったのですか。本文中の言葉を用いて七十字以内で説明しなさい。

問六 D このときになって、ようやく、智久は彼女の名前を知り、個人として認識したのだった。 とありますが、それ以前には「智久」は「彼女」をどのような人だと認識していましたか。その説明として正しいものを、次のア～エの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 子供の絵本の読み聞かせが上手な人だという認識。
- イ 面白い本を知っている人であるはずだという認識。
- ウ 「宮沢永遠子」という名前が素敵な人だという認識。



